



九州では大分など3県だけに生息する国の特別天然記念物「ニホンカモシカ」の推定頭数が大幅に減少していることが各県の合同調査で判明しました。

① 今回の調査での推定頭数は何頭でしたか？それはピークの1995年ごろと比べてどれくらいの頭数ですか？

今回の調査での推定頭数は約200頭で、95年ごろと比べ、10分の1の頭数。

② 推定頭数が大きく減った要因は何でしょう？

シカの増加で餌となる植物が減ったことや獣害対策の罠に捕獲されたことなどが要因とみられる。

③ 推定頭数が「200頭」だったことについて、保護指導委員の馬場稔さん(66)は何と話していますか？

「中・大型の動物は個体を維持できる生息数の目安が500頭程度とされ、200頭は絶滅が危惧されるほどの衝撃的な数字」と話している。

④ 保護対策として必要なのはどんなことですか？三つ挙げてください。

▽高標高地の植生回復 ▽生息分布の正確な把握 ▽関係部署と連携し、誤った捕獲を防ぐ体制整備

シカ増え餌減少 罠で誤って捕獲

ニホンカモシカ激減

大分など九州3県 25年で1/10に

九州では大分、熊本、宮崎3県だけに生息する国の特別天然記念物「ニホンカモシカ」の推定頭数が、ピークの1995年ごろと比べ、10分の1となる約200頭まで減少したことが各県の合同調査で判明した。シカの増加で餌となる植物が減ったことや獣害対策の罠に捕獲されたことなどが要因とみられる。大分県教委は関係機関と連携して生息状況を把握し、保護に努める。

合同調査は生息環境に関する総合的な資料を収集する目的で2018、19の2カ年度で実施した。1987、88年度から約7年置きに調べている。

5回目の今回は232の調査区画でふんの数を調べ、森林管理団体などへのアンケートや目撃情報を参考にして生息範囲を求め、頭数を推定した。生息状況を把握するため、センサーカメラも初めて活用した。

その結果、3県の生息頭数は計約200頭で、前回の11、12年度調査の810頭から減少。大分県内は生息地の中心とされていた祖母・傾山系の標高が高い一帯はほとんどおらず、周辺の300〜1400mの標高地を確認した。他県でも生息地の標高が下がり、南側に移りつつある状況が明らかになった。

県は保護指導委員を務める馬場稔さん(66)「北九州市立いのちのたび博物館元学芸員、福岡県水巻町」は

落や経緯が不明な死骸もあった。大分県は絶滅の恐れがあるとして、今年7月にニホンカモシカを県条例に基づき希少野生動物植物に指定した。

「中・大型の動物は個体を維持できる生息数の目安が500頭程度とされ、200頭は絶滅が危惧されるほどの衝撃的な数字」と説明。生息域の変化は高標高地にある餌の減少がシカが食べにくいためではないか。九州のニホンカモシカは各地に分散し、繁殖しにくい点でも状況は良くない」と指摘する。

保護対策として▽高標高地の植生回復▽生息分布の正確な把握▽関係部署と連携し、誤った捕獲を防ぐ体制整備などに地道に取り組む必要性を訴える。

県教委文化課は「各県の関係市町村や関係部局と連携し、今後の対策を検討したい。合同調査だけでなく、通常や追加調査で生息情報を積極的に収集する。県民にも目撃情報の提供を呼びかけていきたい」と話している。



ニホンカモシカ
ウシ科の日本固有種。雌雄とも黒い角を持ち、全身が灰色、灰褐色の長い毛で覆われている。本州や四国、九州に分布し、標高1400m以上の山地や岩場に多く生息する。

写真は豊後大野市三重町で撮影されたニホンカモシカの親子(2019年1月20日、県教委文化課提供)